



やってみる人びと、 いろいろ挑戦中！

今年度本格始動した「てみるの時間」では、やっ“てみる”気持ちを持つみなさんが、アートに関する様々なプログラムに挑戦中です。その様子を少しだけお届けします。参加者のエネルギーに押され、次に参加し“てみる”側にいるのは、あなたかもしれません。

#てみる広報室

展覧会や舞台芸術を鑑賞・取材し、その感動をSNSで“伝えてみる”通年プログラムを実施中です。毎回取材も意見交換も盛り上がるので、投稿からもその熱が伝わるはず。近代美術館SNSで紹介中です。ぜひ体感ください！



「#てみる広報室」取材の様子

特集展示

子連れ de アート WEEK

0歳からのワイワイびじゅつかん

2026年3月7日[土]–22日[日]

赤ちゃんや子ども連れの方にも、安心して美術館を楽しんでほしい。今年度は、春からベビーカーツアーや親子ツアーを行ってきました。アットホームな雰囲気で、お子さんだけでなくお家の方や私たち職員も気持ちがあほぐれ、笑みがこぼれます。今回の"ワイワイびじゅつかん"展は、子ど

ぶんかつギャラリー

分割されたギャラリーを発表の場とする公募型企画。昨年に続いて第2弾を開催します。昨年は作品を初めて発表する方もいて、やっ“てみる”パワーを強く感じられました。今回もどんな作品と出会えるか楽しみです。



昨年度「ぶんかつギャラリー」設営の様子

応募：10月31日締切（必着）

展示期間：

2026年1月20日[火]—25日[日]

会場：近代美術館 ギャラリー（1階）

詳細は「てみるの時間」

ウェブサイトをご確認ください。

主催：

徳島県立近代美術館/

徳島県立二十一世紀館



所蔵作品紹介

オシップ・ザツキン

〈女性立像〉

1922年 ブロンズ 77.0×31.0×19.2cm

1910–30年代、数多くの若い芸術家たちが世界中、とりわけ東欧から、芸術の都・パリに集まりました。彼ら異邦人は総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれ、それぞれが個性的な作風で活躍します。この彫刻の作者、オシップ・ザツキン(1890–1967)もその一人です。ザツキンはロシア帝国（現・ベラルーシ共和国）出身で、パリに出てきたのは1909年。それ以前に地元ロシアやイギリスの美術学校で学んでおり、パリでもまず美術学校に入学しました。しかし半年ほどで退学。彼は学校の教育よりむしろ、大英博物館やルーヴル美術館で見た世界各地の古代彫刻に惹かれたのです。またこの頃にキュビズム、そしてアフリカ彫刻にも触れました。



パリへ来た当初はロダンやブールデルの影響で写実的な彫刻を制作していたザツキンですが、1913年頃にアーキベンコやブランクーシの作品を見て、その簡潔で単純化された表現に衝撃を受けます。彼らもまた1900年代に東欧からパリへやってきて、それまでにない彫刻表現を生み出した作家たちでした。ザツキンはそこから、新たな作風を模索していくことになるのです。途中、第一次世界大戦への従軍とそれによる負傷のため、数年間の中断を余儀なくされますが、それでも1920年頃、彼はついに独自の作風を生み出すに至りました。この作品が制作されたのもその頃です。単純化され、幾何学的な形態によって構成された女性の姿は、キュビズムの影響を示しています。ただしその他にも、古代彫刻やアフリカなど各地の民族美術の影響も見とれます。つまり、キュビズム以外にも多くのものを研究した結果、生まれたのがこの作風なのです。この作品では、女性の姿勢や身体各部位のバランスがボリューム感を強調し、実際の身体とは異なる独特の凹凸表現が彫刻の表面にリズムを生んでいます。これらの表現、特に凹凸の表現は、この時期のザツキン作品の特徴と言えます。彼がこの作風で制作したのは1920年代前半の数年間で、その後は次々と異なる作風に向かっています。そのような変化の一方で、彼はいつも変わらず人間を見つめ、生涯を通じて多くの人間像を制作した作家でもあります。彼の人間像はどれも、豊かな叙情性を持っているのが特徴です。この作品でもそれは変わりません。単純化された幾何学的な構成にもかかわらず、無機質な冷たさは感じられず、むしろ人間としての温もりや生命感、感情といったものが伝わってきます。そのように、造形的な面白さと人間的な感情を絶妙なバランスで両立させている点が、ザツキンの作品の大きな魅力だと言えるでしょう。

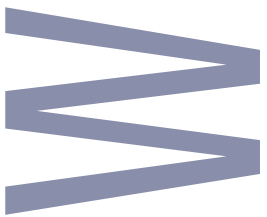
（学芸員 井手迫蒼）



アルベルトジャコメッティ〈女性立像〉1952年



徳島県立
近代美術館ニュース



The Tokushima
Modern Art Museum



136 December
2025



所蔵作品展 2025年度Ⅱ

空間往来

2025年12月6日[土]–2026年4月5日[日]

*会期中展示替えを行います。

展示室1 人間像

徳島県立近代美術館では、人の形に注目し、人間像が表現された作品を収集しています。今回は、絵画の中に描かれた空間や、彫刻のまわりに広がる空間に注目します。展覧会タイトル「空間往来」には、「それぞれの作品がもつ独自の空間に入り込んだような感覚で楽しんで見てもらいたい」という思いを込めています。ぜひ、会場でご体感ください。

絵画と空間—遠近法をめぐって

遠近法とは、目の前に広がる三次元の空間を、二次元の平面（絵画）に立体感や奥行きをもって表すための技法です。線遠近法（透視図法）、空気遠近法、色彩遠近法など、いくつかの種類がありますが、狭義にはルネサンス期に確立・発展した、消失点に向かって線を収束させる線遠近法（透視図法）を指すこともあります。



アルベール・グレーズ〈台所の母子〉1911年

14世紀以降の西洋絵画、そしてそれに影響を受けた絵画などにおいて、遠近法は空間を描く手法として絶大な力を持ち続けました。しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけて、伝統的な価値観を覆すような新しい芸術運動が次々と誕生し、革新的な

表現が試みられるようになります。そのなかで、絵画は従来の遠近法から解き放たれていきました。

ここでは、遠近法の仕組み自体を追求したり、遠近法を用いながらあえて強調や歪みを取り入れたりして、独自の表現を生み出した現代作家の作品をご紹介します。遠近法の約束を逆手に取った高松次郎の〈遠近法のマラソン〉や、無機質な室内空間を描いた四宮金一の〈ROOM（27）椅子なき静座〉、やなぎみわの初期代表作「エレベーターガール」シリーズから〈次の階を探してI〉などを展示します。

キュビスムー空間表現の革命

キュビスムは、20世紀初頭にパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって生み出された芸術運動です。従来の遠近法や、光と影を描写する陰影法を排し、対象を複数の視点からとらえて幾何学的な形に分解し、平面上に再構成するという革新的な試みでした。それは、これまでになかった新しい空間のとらえ方を提示するものであり、以後の多くの芸術家に大きな影響を与えました。

ここでは、ピカソによる版画作品のほか、キュビスムに影響を受けた作家の作品をご紹介します。キュビスム運動の初期に描かれたアルベール・グレーズの〈台所の母子〉や、直線的な形態や面によるキュビスム的な構成を残しつつ、豊かで優しい姿を見せるアンリ・ローランスの〈片腕をあげて座る女〉などを展示します。

彫刻と空間

彫刻は三次元空間に制作される視覚芸術です。展示室に彫刻を置くと、その周りには彫刻が存在しない「空間」が生まれます。

当館のロビーにヘンリー・ムーアの〈着衣の横たわる母と子〉があるのはご存じでしょうか。横たわる母親の腕の中に幼子が眠るこの作品は、ムーアの特徴のひとつである「空洞」を備えています。ムーアは、塊



三宅克己〈切り通し〉1894年
（展示期間12月6日〔土〕―2026年2月8日〔日〕）

としての彫刻に新たな空間性を導入し、現代彫刻に多大な影響を与えました。今回は彫刻と併せてムーアによる版画作品をご紹介します。版画集〈彫刻のためのアイデア〉は、彫刻を作る前の作家のスケッチブックを垣間みるような魅力を持っています。

その他、アルベルト・ジャコメッティの〈女性立像〉やアントニー・ゴームリーの〈レバー〉など、空間との関わりを強く意識させる作品を展示します。

所蔵作品展 2025年度Ⅱ

「空間往来」に関連する催し

こども鑑賞クラブ+

12月13日〔土〕10時30分―12時

講師:近代美術館スタッフ

対象:中学生～大学生 美術館ロビーに集合

電話、メール申込(当日参加可)

学芸員による展示解説

12月21日〔日〕、2026年2月23日〔月・祝〕

いずれも14時―14時45分

講師:久米千裕(主任学芸員)

展示室1、2 申込不要 要観覧券(2月23日は無料観覧日)

キュビスム入門ツアー

(スライドトーク付き)

2026年1月18日〔日〕14時―15時

講師:井手迫蒼(学芸員)

展示室1(3階講座室集合) 申込不要 要観覧券

こども鑑賞クラブ+

2026年2月28日〔土〕14時―14時45分

進行:美術館スタッフ

対象:小学生(保護者同伴可)

美術館ロビーに集合 定員30名程度

電話、メール申込(当日参加可)

無料(保護者は要観覧券)

展示室1 現代版画

版画の多彩な表現をご紹介します。

白と黒の世界1

12月6日〔土〕―2026年1月12日〔月・祝〕

白と黒の世界2

2026年1月14日〔水〕―2月8日〔日〕

風景版画1

2026年2月10日〔火〕―3月8日〔日〕

風景版画2

2026年3月10日〔火〕―4月5日〔日〕

展示室2 徳島ゆかりの美術

空間の作り方

当館では、徳島にゆかりがある作家の作品や、徳島の風景や風物に取材した作品を収集しています。

今回は、「空間往来」というテーマに合わせて、ゆかりの作家による風景画を中心にご紹介し、絵画の画面における空間表現の違いに注目します。国内はもとより海外へたびたび出かけて風景を描いた三宅克己や、フランスに留学し西洋絵画を学んだ伊原宇三郎、洋画的な日本画に挑戦する一方で、身近にある美しい日本の自然も追求した廣島晃甫らの作品を展示します。

同じモチーフを描いていたとしても、国や時代、画家の学んだ背景によってその絵の空間表現は大きく異なります。その多様な表現のあり方に注目しながら、作品をお楽しみください。

(主任学芸員 久米千裕)



廣島晃甫〈猫〉昭和初期
（展示期間2026年2月10日〔火〕―4月5日〔日〕）

特集展示

没後5周年 菊畑茂久馬展

2026年1月24日〔土〕-2月15日〔日〕

本展は、福岡を拠点に日本の前衛美術を牽引した徳島ゆかりの作家、菊畑茂久馬（1935～2020）が没してから5年の節目を迎えるに当たり、全国の美術館が、自館が所蔵する菊畑の作品を展示する「LINKS－菊畑茂久馬」プロジェクトの一環として開催するものです。

菊畑は1957年に福岡の前衛集団、九州派に加わり、1960年代の反芸術運動の旗手として頭角を現します。60年代初めに手がけた「奴隷系図」、「ルーレット」シリーズは、抽象表現やネオダダなど同時代の美術動向の影響を受けつつも、作家独自の土俗的なエネルギーの迸る斬新な表現と目され、世界的な注目を集めました。

しかし、1970年の大阪万博開催に沸き立ち、国から芸術へ大量の資金が投入されることに強い抵抗を覚えた菊畑は、60年代から80年代初めまで約15年間、公に作品を発表する機会を極端に減らします。この“沈黙”の時期に、菊畑は日常的な素材を組み合わせたオブジェの制作に着手し、「原器」と名付けたそれらの作品を平面化する試みとして、版画に取り組みました。そして80年代以降、キャンバスに鉄棒を縛りつけその上から絵具を塗り込めた「天動説」を初め、「月宮」「月光」など大型作品のシリーズを発表していきます。本展では戦後、深い思索の下に多様な創作を展開した作家の軌跡を、1960―80年代にかけて制作された作品群によって振り返ります。この機会に、ぜひご鑑賞ください。

(主任 三宅翔士)

特集展示「没後5周年 菊畑茂久馬展」に関する催し

展示解説

2026年1月25日〔日〕、2月14日〔土〕

いずれも10時30分―11時

講師:三宅翔士(主任)

展示室3 申込不要 要観覧券

こども鑑賞クラブ+

2026年1月31日〔土〕14時―14時45分

進行:美術館スタッフ

対象:小学生(保護者同伴可) 美術館ロビーに集合

定員30名程度

電話、メール申込(当日参加可)

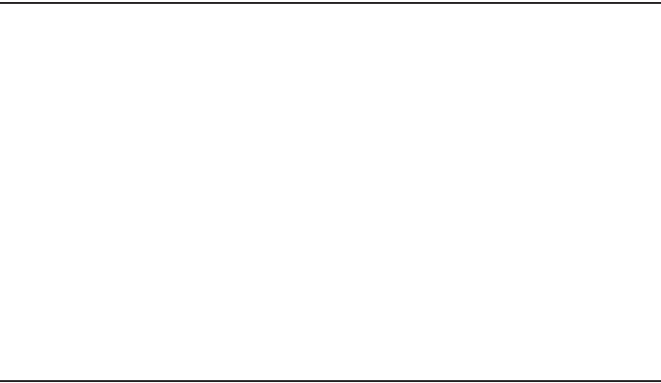
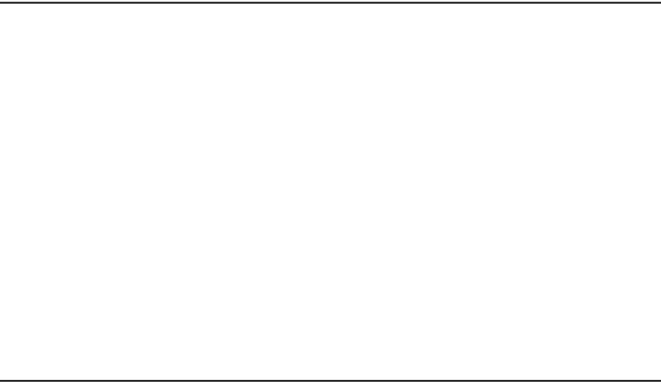
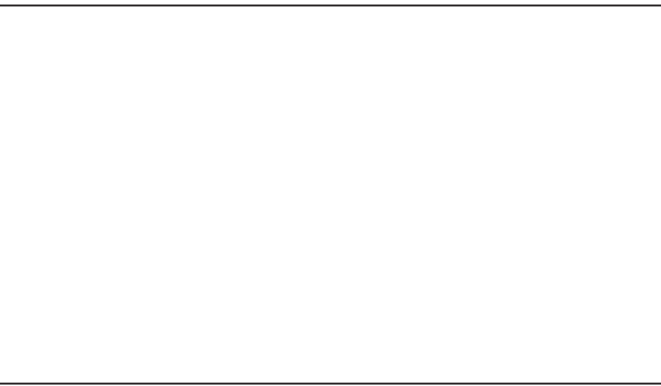
無料(保護者は要観覧券)



菊畑茂久馬
〈奴隷系図一円鏡によるNo.12〉
1962年



菊畑茂久馬〈天動説 十一〉
1985-87年



徳島県立近代美術館ニュース

第136号 2025年12月1日発行(12月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

イベント申込用メール:

ae@bunmori.tokushima.jp

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

https://art.bunmori.tokushima.jp/

